學資に添へて都の姉へ

岩代須賀川本町　服部水仙子

この二三日の暖くなりましたこと、蠶（かいこ）が出そうな氣候になりました。東京はさぞ暖かでせうね、も少し過ぎると花も盛り、それに博覧會があるのでどんなにか賑かになるでせう。家からは誰れも行かないことに決めました。でも若しかすると母様が一郎を連れて行くやうになるかも知れません。かもですよ、だから當にしないで待つてゐらつしやい。

父様はゆうべ、夜汽車で宇都宮まで、四五日かゝるか知れませんつて、それで私に是を送るやうにつて言ひつけて行きましたの。今月のは定額より少し多いでせう、これは母様がそつと増して下すつたのです旅に居れば何かと心細いものだからつて。だけどお前またリボンを送れの何のつて言つて遣つてはいけないよ、だつて。いくら私だつてさう／／姉さんの懐をいぢめやしませんわねぇ。

昨秋は油斷してゝ袷を催促されて手ん手古舞したから今度はまごつかないやうにと思つて、きのふから縫ひ初めました、縞柄は私のよりずつと派手なのよ母様が、これではいくらなんだつてあんまりだと仰言るから私、いつか送つて戴いたあのお友達の寫眞を出して來て、ホラ此通り皆派出なのですものつて言つたら、さうねつて默つてしまひましたの、だからそれにしました、實際東京は派出なんですものね、田舎の人は驚い

てしまふわ。いくら飛んでも刎ねても綻びないやうにしつかり縫つてあげませう、よその學校と違つて運動ははげしく無いでせうけれども。これからはそろ／＼畑が面白くなつて來ます。私もちよい／＼出て見る積りよ、今も母様について菜を取りに往つて、來たとこ。那須山の煙りがよく見えましたつけ。

いくらお醫者の學校でも躰は何よりお大切に。

受取りは繪はがきで頂戴な。さやうなら。

【入力者注】　底本は総ルビですが、ルビは一部のみ残しました。

底本：「女子文壇」第三巻第六號
明治四十(1907)年六月一日発行
テキスト入力：　小林　徹

公開：令和二年十二月二十九日
改訂公開：令和　　月　　日
リンク：水野仙子ホームページ